セロ弾きのゴーシュ

目次

セロ弾きのゴーシュ--------------3

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。  
　ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出すの練習をしていました。  
　トランペットは一生けん命歌っています。  
　ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。  
　クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。  
　ゴーシュも口をりんと結んでをのようにしてを見つめながらもう一心に弾いています。  
　にわかにぱたっと楽長が両手を鳴らしました。みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。  
「セロがおくれた。トォテテ　テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」  
　みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額にを出しながらやっといまわれたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱっとちました。  
「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」  
　みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞきんだりじぶんの楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのでした。  
「今の前の小節から。はいっ。」  
　みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたっと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきっとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさっきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。  
「ではすぐ今の次。はいっ。」  
　そらと思って弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんとんでどなり出しました。  
「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがあのだの砂糖屋のなんかの寄り集りに負けてしまったらいったいわれわれのはどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけたのひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかっきりボックスへ入ってくれえ。」  
　みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマッチをすったりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシュはそのなみたいなセロをかかえての方へ向いて口をまげてぼろぼろをこぼしましたが、気をとり直してじぶんだけたったひとりいまやったところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。  
　その晩くゴーシュは何かきな黒いものをしょってじぶんの家へ帰ってきました。家といってもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトのをきったりの虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるとさっきの黒い包みをあけました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれをの上にそっと置くと、いきなりからコップをとってバケツの水をごくごくのみました。  
　それから頭を一つふってへかけるとまるでみたいなでひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。  
　夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走ってとてもい顔つきになりいまにもれるかと思うように見えました。  
　そのときかうしろのをとんとんとくものがありました。  
「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたようにびました。ところがすうと扉をしてはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きなでした。  
　ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。  
「ああくたびれた。なかなかはひどいやな。」  
「何だと」ゴーシュがききました。  
「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。  
　ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。  
「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトのをかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。ねこめ。」  
　すると猫はをまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらって云いました。  
「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」  
「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」  
　セロ弾きはしゃくにさわってこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。  
「いやごはありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」  
「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」  
　ゴーシュはすっかりまっ赤になってひるま楽長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかに気を変えて云いました。  
「では弾くよ。」  
　ゴーシュは何と思ったかにかぎをかって窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりがのなかへ半分ほどはいってきました。  
「何をひけと。」  
「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口をいて済まして云いました。  
「そうか。トロメライというのはこういうのか。」  
　セロ弾きは何と思ったかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるでのようなで「の」という譜を弾きはじめました。  
　すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぱっと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶっつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシュはすっかりくなってますます勢よくやり出しました。  
「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」  
「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」  
　猫はくるしがってはねあがってまわったり壁にからだをくっつけたりしましたが壁についたあとはしばらく青くひかるのでした。しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。  
　ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、  
「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。  
　すると猫もけろりとして  
「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。  
　セロ弾きはまたぐっとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマッチを一本とって  
「どうだい。をわるくしないかい。舌を出してごらん。」  
　猫はばかにしたようにった長い舌をベロリと出しました。  
「ははあ、少しれたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマッチを舌でシュッとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫はいたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口のへ行って頭でどんとぶっつかってはよろよろとしてまたって来てどんとぶっつかってはよろよろまた戻って来てまたぶっつかってはよろよろにげみちをこさえようとしました。  
　ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが  
「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」  
　セロ弾きは扉をあけて猫が風のようにのなかを走って行くのを見てちょっとわらいました。それから、やっとせいせいしたというようにぐっすりねむりました。  
　次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをかついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますとか屋根裏をこっこっと叩くものがあります。  
「猫、まだこりないのか。」  
　ゴーシュが叫びますといきなりの穴からぽろんと音がして一の灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかっこうでした。  
「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。  
「音楽を教わりたいのです。」  
　かっこう鳥はすまして云いました。  
　ゴーシュは笑って  
「音楽だと。おまえの歌は、かっこう、かっこうというだけじゃあないか。」  
　するとかっこうが大へんまじめに  
「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。  
「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさんくのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」  
「ところがそれがひどいんです。たとえばかっこうとこうなくのとかっこうとこうなくのとでは聞いていてもよほどちがうでしょう。」  
「ちがわないね。」  
「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかっこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」  
「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれのへ来なくてもいいではないか。」  
「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」  
「ドレミファもくそもあるか。」  
「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」  
「外国もくそもあるか。」  
「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」  
「うるさいなあ。そら三べんだけいてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」  
　ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。  
「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」  
「うるさいなあ。ではおまえやってごらん。」  
「こうですよ。」かっこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから  
「かっこう」と一つなきました。  
「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六も同じなんだな。」  
「それはちがいます。」  
「どうちがうんだ。」  
「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」  
「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。  
　するとかっこうはたいへんよろこんでからかっこうかっこうかっこうかっこうとついてびました。それももう一生けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。  
　ゴーシュはとうとう手が痛くなって  
「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかっこうは残念そうにをつりあげてまだしばらくないていましたがやっと  
「……かっこうかくうかっかっかっかっか」と云ってやめました。  
　ゴーシュがすっかりおこってしまって、  
「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。  
「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」  
「何だと、おれがきさまに教わってるんではないんだぞ。帰らんか。」  
「どうかたったもう一ぺんおねがいです。どうか。」かっこうは頭を何べんもこんこん下げました。  
「ではこれっきりだよ。」  
　ゴーシュは弓をかまえました。かっこうは「くっ」とひとつ息をして  
「ではなるべく永くおねがいいたします。」といってまた一つおじぎをしました。  
「いやになっちまうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかっこうはまたまるで本気になって「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふっと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのでした。  
「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってしまうんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセロをやめました。  
　するとかっこうはどしんと頭をかれたようにふらふらっとしてそれからまたさっきのように  
「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ」とってやめました。それからめしそうにゴーシュを見て  
「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。  
「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしていられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。  
　東のそらがぼうっと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へどんどん走っています。  
「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちょっとですから。」  
　かっこうはまた頭を下げました。  
「れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまうぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。  
　するとかっこうはにわかにびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そしてにはげしく頭をぶっつけてばたっと下へ落ちました。  
「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立って窓をあけようとしましたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかっこうがばっとぶっつかって下へ落ちました。見るとのつけねからすこし血が出ています。  
「いまあけてやるから待っていろったら。」ゴーシュがやっと二寸ばかり窓をあけたとき、かっこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじっと窓の向うの東のそらをみつめて、あらん限りの力をこめた風でぱっと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたってかっこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をばっとけりました。ガラスは二三枚物すごい音してけ窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとなった窓のあとをかっこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまいました。ゴーシュはしばらくれたように外を見ていましたが、そのままれるようにのすみへころがってってしまいました。  
　次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水をのんでいますと、またをこつこつくものがあります。  
　今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追いってやろうと思ってコップをもったまま待ち構えてりますと、扉がすこしあいて一疋のの子がはいってきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、  
「こら、狸、おまえはということを知っているかっ。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へったままどうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたって  
「狸汁ってぼく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わずき出そうとしましたが、まだ無理にい顔をして、  
「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたとておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに  
「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。  
「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」  
　狸の子はにがついたように一足前へ出ました。  
「ぼくはの係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」  
「どこにも小太鼓がないじゃないか。」  
「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。  
「それでどうするんだ。」  
「ではね、『な馬車屋』を弾いてください。」  
「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」  
「ああこのだよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。  
「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするのかと思ってちらちらそっちを見ながら弾きはじめました。  
　すると狸の子は棒をもってセロのの下のところををとってぽんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシュはこれはいぞと思いました。  
　おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。  
　それからやっと考えついたというように云いました。  
「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいにれるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」  
　ゴーシュははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと音が出ないような気がゆうべからしていたのでした。  
「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが  
「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」  
「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。  
「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしょってゴムテープでぱちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。  
　ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいってくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気をとりそうと急いでねどこへもぐりみました。  
　次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていますとまたかをこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいって来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちょろちょろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきょろきょろしながらゴーシュの前に来て、青いの実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。  
「先生、このがあんばいがわるくて死にそうでございますが先生おになおしてやってくださいまし。」  
「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていましたがまた思い切ったように云いました。  
「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」  
「何のことだかわからんね。」  
「だって先生先生のおかげで、さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」  
「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな。もっとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。ははん。」ゴーシュはれてその子ねずみを見おろしてわらいました。  
　するとのお母さんは泣きだしてしまいました。  
「ああこのはどうせ病気になるならもっと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにぴたっと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」  
　ゴーシュはびっくりしてびました。  
「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」  
　野ねずみはを片手でこすりこすり云いました。  
「はい、ここらのものは病気になるとみんな先生のおうちの床下にはいってすのでございます。」  
「すると療るのか。」  
「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療る方もあればうちへ帰ってから療る方もあります。」  
「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるというのか。よし。わかったよ。やってやろう。」ゴーシュはちょっとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロのから中へ入れてしまいました。  
「わたしもいっしょについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おっかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロに飛びつきました。  
「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。  
　野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。  
「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」  
「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるでのような小さな声でセロの底で返事しました。  
「さ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをごうごうがあがあ弾きました。するとおっかさんのねずみはいかにも心配そうにその音のをきいていましたがとうとうこらえ切れなくなったふうで  
「もうです。どうか出してやってください。」と云いました。  
「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシュはセロをまげて孔のところに手をあてて待っていましたら間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシュは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるぶるふるえていました。  
「どうだったの。いいかい。気分は。」  
　こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぶるぶるぶるぶるふるえていましたがにわかに起きあがって走りだした。  
「ああよくなったんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。」おっかさんのねずみもいっしょに走っていましたが、まもなくゴーシュの前に来てしきりにおじぎをしながら  
「ありがとうございますありがとうございます」と十ばかり云いました。  
　ゴーシュは何がなかあいそうになって  
「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。  
　すると野鼠はびっくりしたようにきょろきょろあたりを見まわしてから  
「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふくらんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちのへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びになんど参れましょう。」と云いました。  
「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」  
　ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。  
　野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。  
「あああ。鼠と話するのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどっかりれてすぐぐうぐうねむってしまいました。  
　それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にあるへみんなぱっと顔をほてらしてめいめい楽器をもって、ぞろぞろホールのから引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールではの音がまだのように鳴ってります。楽長はポケットへ手をつっ込んで拍手なんかどうでもいいというようにのそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうしてしさでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマッチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。  
　ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいって来ました。  
「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」  
　すると楽長がきっとなって答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです。」  
「では楽長さん出てしてください。」  
「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」  
「わたしがですか。」ゴーシュはにとられました。  
「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。  
「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせてをあけるといきなり舞台へゴーシュをし出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもってじつに困ってしまって舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そうひどく手をきました。わあと叫んだものもあるようでした。  
「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ていろ。のをひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。  
　それからあのの来たときのようにまるでった象のようなで虎狩りを弾きました。ところがはしいんとなって一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながってぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶっつけた所も過ぎました。  
　曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちょうどその猫のようにすばやくセロをもって楽屋へげ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあとのように眼をじっとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思ってみんなの間をさっさとあるいて行って向うのへどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。  
　するとみんなが一ぺんに顔をこっちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。  
「こんやは変な晩だなあ。」  
　ゴーシュは思いました。ところが楽長は立って云いました。  
「ゴーシュ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」  
　仲間もみんな立って来て「よかったぜ」とゴーシュに云いました。  
「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。の人なら死んでしまうからな。」楽長が向うで云っていました。  
　その晩くゴーシュは自分のうちへ帰って来ました。  
　そしてまた水をがぶがぶみました。それから窓をあけていつかかっこうの飛んで行ったと思った遠くのそらをながめながら  
「ああかっこう。あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんじゃなかったんだ。」と云いました。

底本：「新編　銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社   
　　　１９８９（平成元）年６月15日発行  
　　　１９９４（平成６）年６月５日13刷  
底本の親本：「新修宮沢賢治全集　第十二巻」筑摩書房  
　　　１９８０（昭和55）年１月  
入力：水口充、野口英司  
校正：野口英司  
１９９９年７月23日公開  
２００８年10月25日修正  
青空文庫作成ファイル：  
このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

セロ弾きのゴーシュ

発行日　令和元年８月10日

著　者　宮沢賢二

発行者　長尾貴憲

発　行　一般社団法人日本電子書籍技術普及協会

大阪府大阪市北区梅田１－11－４－1000

© kenji miyazawa,JETDA 2019